
NOW Lording.....

山原青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NOW Lordining.....

【NZコード】

Z0901X

【作者名】

山原青

【あらすじ】

主人公は平凡な高校生。

名前は山原蒼樹。

蒼樹は頭、運動神経は平凡の一言だった。

だが一つだけ本人が胸を張つて得意、好きと言える物があった。それはゲーム。

その中でもRPG。だが、最近になり、唯一生きがいだったゲームでさえも、退屈さを感じずにはいられなくなっていた。

そんな蒼樹はある日、あるゲームと出会った事でその人生を一変さ

せることになる。それは、御伽の世界だった……。

始まり

ロード中…ロード中…

テレビ画面に映る文字を虚ろな眼で見ながら、俺は傍らに置いておいたペットボトルジュースを手に取る。キャップを開け、中身を口から流し込むと、それまで乾いていた喉に潤いが戻る。

俺は、ゲーム機のコントローラーを素早く操り、キャラクターをセーブポイントに移動させる。

セーブ完了の文字が出ると同時に、ハードのスイッチとテレビの電源を消すと、画面は今まで眩いばかりの色合いを見せていたはずが、何も映さぬ漆黒に変わった。

今日は朝早くから学校がある。

コントローラーを投げ捨て電気を消して、ベッドに潜り込むと、俺は直ぐ様寝息をたてはじめた：

。 。 。

ピリリリ

携帯電話のアラーム音が、大音量で部屋の中に木霊する。

朝一番に耳を痛めつけられた事に少々の苛立ちを感じながらも、俺は軽く手櫛をしたままの手で、携帯電話の目覚ましを停止した。携帯電話の画面から得られる情報によると、時刻は7時30分と、

現役高校生が起きたのに相応しい時間だった。

俺はクローゼットに立てかけておいた制服を取ると、素早く着替え始める。

寝巻きを放り捨て、今だに睡魔を加速させる眼を擦り、部屋の外へと繋がる扉を開いた。

水道で顔を洗い、リビングに足を向けると、朝に似合つた良い香りが俺の鼻を通りて脳に信号を伝え、食欲を発生させる。

「あ、やつと起きたの？朝ご飯用意してあるわ。やつと食べなさい。」

俺は母親に軽く返事をして、椅子に座ると、貪る様に朝食を平らげていく。今日の朝食はワインナー・エッグにサラダだった。パンにバターを塗りながらも、他の物を詰め込んでいく。最後のワインナーを箸で落とさない様、器用に摘み、今だに色々な食材が混沌と混ぜられている口の中に勢いよく放り込む。

パリパリと良い音がして、口の中にジューシーな肉汁が広がる。

俺は満腹になつた腹を軽くさすりながら、大きめのコップに牛乳を注ぎ入れる。

今日は朝から暑かつた。

そのせいか、冷たい牛乳が体の芯から冷やしてくれる。

俺は鞄を肩にかけ、今日も学校へ向かうため、革製の靴を鳴らす……。

○ ○ ○

県立星恭高校……。

他の高校と比べても何ら遜色のない、ありふれた公立高校。

ここで約500名の生徒達が日々勉強、スポーツ、はたまた恋愛に

喧嘩：青春を満喫している。

俺はいつもの様に下駄箱に靴を突っ込むと、踵が踏み慣らされた上履きを床に置く。

自らの教室に向かうため、階段を四苦八苦しながら登る。教室は二階にあり、毎朝登るのには良い運動だ。
煩わしい鞄を持ちやすい位置に調整し、息を僅かに漏らしながら足の上下運動を行う。

俺の教室は今年の春からこの高校の1年2組だ……。

。 。 。

三階に到達すると、ガヤガヤと同級生の声がうるさい。俺は耳を塞ぎたい衝動に駆られながらも、息を整えつつ自分のクラスに入つていいく。

クラスは36人構成の普通なものだ。

現在教室には、半分程の人数が登校していた。
部活や係りの仕事などを率先してやっている人もいる訳だから、この人数は普通と言えるだろう。

現在8時15分程……。

俺は教室に設置されている時計を見るのを止め、授業を受けるための席に、真っ直ぐに歩行進路を設定した。

鞄を肩から降ろし、机の横に引っ掛けると同時に、俺の耳に聞き慣れた声が響く。

「今日も朝から眠そうな顔してるね）。夜遅くまで勉強でもしてた？」

俺は視界をそつちに向けるのも面倒なので、顔を見ないで返事をする。

「新作のゲーム。RPGのやつ。勉強なんかするかよ。」

「ああ、あのCMで派手に宣伝してるやつね。やったの？」

「ついさっき終わらした。あいやハードの性能に頼り過ぎだ。画質と迫力で誤魔化してんな。内容ありきたりだったし、正直微妙だった。」

俺は頭を搔きながら盛大な欠伸をし……ようとしたが、なんとか堪えた。

「どうやら午前5時まで働いてもらつた俺の両手は、とても授業なんて受けれる状態じゃないらしい。

「へえ、でもいつもそんな事言つてるよね。山原って実はゲームそ

んな好きじゃないんじゃない?」

山原蒼樹
やまはら あづき

俺の名前。

「知りやーよ、そんの…。」

俺は鞄を漁り、朝学校に来るついでに買った、カフェオレを取り出す。

同じ袋に入っていたストローを器用に片手で取り出し、握つて机に軽く叩きつける事で封を開ける。

紙パックを開けると、そこに元のストローを差し込み、口に咥える。

「知らねーって…じゃあ何のためにゲームばっかやってんの?」

俺はストローから口を離し、朝から全くもって会話をしたくない奴と向き合つ。

「好きだからだよ。…作品がどうとかじゃなくて…。てかお前に言つても、無駄そうだからこ’や」

俺はため息をつくと、再びストローを吸い始める。

「無駄とはなんだー。無駄とはー。」

「ああ、ひるせーひるせー

「 」 朝まで趣味に没頭してたおかげで、眠いんだ。カロリーメイプルやるからあっちいけ…。」

メイプル味のカロリーメイプルを差し出す。

「ウチは、ガキか?…まあ一応貰うけど…。」

異常にテンションが高い、俺の隣人は今日も同様にウザかった…。

俺は一度携帯を確認すると、そのまま鞄に放り込む。飲み終わった紙パックは元入っていた袋に無造作に突っ込み、これも同様鞄に入れる。

俺はやる気の感じられない体に少しでも力を取り戻そうと、睡眠を与えることにした。

腕を枕にして、顔をうずめる。かねて抑えていた眠気が一気に俺の瞼を下ろす。

一時間目……数学?英語?……どうでもいいか。

俺は眠る。

第一話（前書き）

誤字、脱字、「」感想などがありましたらお願いします m(ーー)

第一話

授業も終わり、教師の無駄に長つたらしい話も聞き終え、今は下校中だ。

時計の針が4の数字を刺す少し前、特にやる事のなかつた俺は帰るついでに行きつけのゲームショップによつて行く事にした。

それもこれも、正直これと云つて仲が良好な奴は俺にはあまりいな
いからだ。

クラスの奴らは仲が悪いとは言えないが、一概に良いとも言えない。

暇があれば話すし、たまには一緒に出かける事もある。

ふざけ合つたりも普通にする。

だが、友達とは言えない。

知り合い以上友達未満…といつたところだろうか。こう考えると友達の定義は難しいと切実に思う…。

まあ、とにかく何が言いたいかと云つて、放課後進んでつむむう
な奴はいないつて事。

あの女?ハハ、名前も知らぬよ。

その、俺は友達がないんだという事を、回りくどく説明したわけ
だが…
つと…

店に着いたか…。

この理由もまた今度。

俺は目の前にそびえ立つ小型のゲームショッピを見据える。

扉の前に立つても自動で開いてくれない所を見ると、旧世代の手動式ドアだと言う事が分かる。

2050年にもなつて“これ”を使ってる所はそうはないだろ。俺は取っ手を力いっぱい握り、体重と筋力を総動員させて開けにかかる。

このドアは重さも並じやない…。

フーフーと走つた後のよつた状態をキープしながら俺は店内へと歩を進める。

「いらっしゃい……つてお前か。」

綺麗にブリーチした短い髪の男は俺の古い馴染みであり、数少ない友人の中の一人だ。

「お前かって何だよ… 一応客だぞ?」

俺は労働させられた事により、少々の悪態をつく。

「今更そんな仲じゃないだろ。それにお前に敬語はなんかムカつぐ。」

カウンターの内側にあるゲームの宣伝ポスターを貼り直しながら、店員らしからぬ発言をする。

この男の名前は長田遊星。

「こいつとは、小学校の頃からの付き合いであり、高校で離れたが、今でも恥じらいを捨てれば親友と呼べる奴だ。

「こいつも気持ちわりいよ。それより、クリアしたぞ。”mono graphiti”。クリア後の裏チャプターの数は8個だった。それと、バグはいつになつても残ってるな…」

俺は鞄から表紙が多色のカラーリングで塗りつぶされている箱を取り出す。

それを親指と人差し指で掴み、ヒラヒラと掲げると、遊星はハアとため息をつき、それを受け取る。

「マジかよ…まだ発売して3日だぞ…。で、どうだった?」

「流石に”Repran”の作品には及ばなかつたが、まあ、楽しめたさ…つづけのは建前…正直ストーリーとかも微妙だつたし、意味の分からんミニゲームとともに中々ウザかつた…多分、少ししたら叩かれるだろうな。」

“Repran”…元々、大手資産持ちのゲーム企業会社とアメリカの電子機器精製会社が合併して作られたかなりの有名会社だ。

俺も一度Repranの作ったMMOを物は試しにとやってみた事があつたが、見事にはまつた。

内容は、出身国を選ぶ事で、魔法が発達している国か科学が発達している国かが分かれその国に戸籍を置きながら、モンスターを殺したり、プレイヤーを殺したり、城を壊したり、車で突っ込んだりとかなり自由度が高いゲームであった。

基本的に俺はイベント形式で物語がどんどん進行して行くようなモノが好きで、自由度が高く、終わりが見えないネットゲームはすぐ飽きが回る事からあまり好かなかつた。

だけどそのゲームは違つた。

まるでプレイヤーの望む心をコントロールしているかのように、アップデートでの追加要素は立ち回る”俺達”を飽きさせる事はなかった。

「あ、そういうや、R e p r a n t といえば、いい情報があるぞ? 酒と菓子ぐらいならあるし、俺の部屋行くか?」

遊星が前掛けを脱ぎながら、俺に一つの提案をする。
平凡高校生の会話に”酒”、俺といいつつの関係性、味覚年齢がわかつてしまふからいただけない。

「…ああ、そうだな。じゃあちょっと寄つて行くかな。」

でも断れないのが俺だらう。

まあ、多分大丈夫だらう。あいにく酒の匂いに気付く程、俺に近づく奴などいないのだから。

俺は笑う。自嘲氣味に、微かに。

親父せんに店番を任せると、階段を上がりつて行く遊星の背中について行く。

。 。 。

「で? Reportの情報つって?」

俺は昔から変わらず日本国民に愛されている例のスナック菓子のつす塩味を、パリパリと音を立てながら食べる。
台の上に缶ビールの空き缶が並んで一本立つてゐるといふを見ると、弱いなれば、既に出来上がつてゐる頃合いだろひ。

だが、俺と遊星は元来強めのようで、アルコール度数7%くらいなら何本飲んだといひで、ほろ酔い程度になるのが関の山だ。

一度、泥酔いしてみよつ、と言つ事になり、どこから持つて来たのか、ビールからテキーラ、スピリタスまでもが俺の部屋に用意された事がある。

因みにスピリタスはアルコール度数96%の酒と言つていいのか、薬品に使われる事もある、まんまアルコールの飲み物だ。

機会があつたら……飲んでみるといい……。

その時の事はよく覚えていないが、泥酔いは出来たと言つ事と、半端じやない程楽しかったという事は少しも霞まず、俺の脳に張り付いている。

因みに朝起きた時、俺は遊星と一緒に肩を組みながら半裸の状態で、冷めた風呂のお湯に浸かっていた。

地獄絵図だった。

思い出したくない事まで思い出してしまった。

俺は一気に缶ビールを煽る。

「聞きてーか？」

遊星がタバコの先端を向けながら言ひつ。

副流煙がエアコンの風でモロに俺の顔面に吹いてくる。

「もつたいぶんなよ？早く教えろよ？」

正直、遊星のゲームショップの息子という立場はいい。ゲームの情報がかなりの頻度で流れてくるのだから。

多分、その情報もかなり後に公開される物だろつ。

期待し過ぎるとろくな事が起きない俺は、期待半分、失望半分のスタンスで話し始めようとする遊星を見る。

「実はな……ＶＲＨＷで、初のＭＭＯが出る。」

遊星の言葉に俺は一瞬心臓さえ止まつたんじやないか？と思える程の硬直をした。

だが、まだ聞かなきやならない事がある。

俺は震える口をどうにか、アルコールで誤魔化しつつ、冷静に問い合わせる。

「…そ、それにRepranと何の関係がある？」

正直言してしまつと、その時の俺はまつ遊星の言わんとしている事に気づいていたかも知れない。

「そのMMOがな…Repranの作品なんだよ。」

俺は内心の興奮を隠せぬ様に、遊星に詰め寄つた。発売日や、運営側の企画者。値段に力の入れよう。これが酒が入つていたからなのかは知らないが、確かに俺の体は一度死にかけた興味を蘇らせていた。

「しかも多分失敗はないぜ。何と言つてもRepranのFair
y Land Online（FLO）の続編らしいからな。」

遊星がニヤリと笑うと、とんでもない事をさらりと告げる。

FLOとは、さつきも言つただろうが、Repranの代表的なゲームだ。
俺が唯一本気ではまつたMMO。

俺は高ぶる思いを抑え、痺れた脚の位置を変えながら飲みかけの缶に手を伸ばす。

残念ながら缶ビールじゃ酔えない。

でも、今はそれでよかつた。

何せ、俺が缶ビールで泥酔いできてしまつたら……俺の意識がはっきりしていなかつたら……たちまち、この情報は夢の中の物になってしまいそうだったから……

俺は「一ヤ一ヤ」と上機嫌のまま、強めの炭酸を喉に通した。

第一話

VRHW。

(バーチャルリアリティハードウェア)

2045年になり、科学の最先端を行くハードが発売された。ゲーム機でりながら、399GBの容量を誇る、最新式だ。

今のゲーム機では、コントローラーと3Dタッチの応用、画質の進化や世界のネットワークへの接続が可能になっている。

今では仕事でさえもゲーム機で行える時代である。なので一概にたかがゲーム、と罵る事は出来なくなつた。

これがPFGI・1089の本質だ。

3Dタッチ。これは画面に細かで特殊な蛍光板のパネル粒子を搭載する事で、スイッチ一つで文字が浮き上がり、それに接触する事で、距離計算と、温度探知でハードにデータを送り込むという物だ。そのパネルや科学物質の完璧なる統合に苦戦し、開発発表は2040年まで持ち越されていた。

細かい事はよく分からぬが、他にも問題点は多かつたらしい。

初めてはパソコンで行われた。

当時は高価で取り引きされており、持っている人は、収入がいいか、ボンボンかの一択であった。

それが近年になり、安価でいて、色々な物に適応される事となつた。その中にゲームもカテゴリーされているというわけだ。

そして、近年。

1947年。

ゲーム会社が前代未聞の発表をした。

バーチャルリアリティハーデウェア

V R H W

これは最初、裏で医学や、軍用、はたまた、痛覚遮断を目的で作られた、仮想世界シミュレーション機器である。

フロントカバーの付いた、ヘルメットのような物で、それに付いて電極を指定された場所に装着する事で、準備完了だ。これが発売された当時は世間で大いに騒がれた。

脳にアクセスするのだ。問題は無いのか？
値段は？容量は？

だが、そんな奴らの期待に背を向けるかのように、同時に発表された事実。

V R H W初のソフトはなんでもないただの、一人で遊ぶ、「ゴルフやテニスと言う物だ。それに、遊ぶためには、役所に行き手続きを済まさなければならない。

それでも買う奴はいたそだが、やはり、それでは若者の腹は満たされない。

今では電子機器の何もかもが、3Dタッチだ。学校の黒板に、感度のいい、デスクパネル。

当然ゴルフやテニス、野球にサッカーだって走る事は出来ずとも、蹴つたりは出来る。

それに、リアリティもある。

なのでVHは発売当時売れ残りが溢れた。

それに、危機を感じた企業が抽選で出したり、格安で販売したりした。

流石に持つてる人は増えたが、やはり、ソフトなどは売れないようだった。

ソフトはやらないのに、ただただアップデートを繰り返して行く、そんな意味の分からぬ事が起き、ネットでも騒がれていた物だ。だが、ついこの前。

VHWの全機、オンライン接続が開始された。

持っている人は皆一様に、今更何故?と思つたはずだ。

なんせ俺もその中の一人だったのだから。

わけが分からず、混乱しながらも気にしない人たちの他にネットではこんな事が騒がれた。

ただのオンライン接続ではない。VRMMOが発売されるのではないか?と。

そしてネット上で、騒がれていた都市伝説は……

今日6月中旬、大手ゲーム企業。

"Repran" の新作ゲーム発表により、真実となつた。

第三話（前書き）

誤字、脱字、「」感想などが「」ありましたら書いて頂ければ光栄です。

m(—)m

今は授業の合間だ。

俺はいつもの様に椅子に氣怠げに腰掛けると、黒色のスクールバッグを漁る。

家を出る前に乱暴に突っ込んだいた携帯を探すために、ガサガサと朝から元気一杯に腕を動かす。

指先に携帯端末の冷たさを感じると、俺はキー・ホルダーなどのストラップはつけておらず、遊び心のないメタリックブルーを取り出す。

今の”携帯端末”は昔に比べ、随分と種類が多くなった。

それも、ＴＰＰによる会社の檄的な増量によるところだろう。関税の掛けりの緩い商品は、出入りがスムーズになつたし、何より、輸入輸出の頻度が昔より断然多い。

その甲斐あって、外国企業の伝染や、日本企業の進出などで、国々による全体会社数が圧倒的に増えた。

今では”携帯電話”と言つても、電話やメール以外に使う事が多くなり、今では携帯端末と呼ばれている。

まあ、略せば”どちらも”携帯”なのだから、後の四文字、三文字は別に関係無いと見て大丈夫だろつ。

俺が携帯端末の開帳ボタンを押すと、途端に不規則に折りたたまれたパネル一つ一つが動き、その液晶画面を露わにする。

素早く入力をこなすと、携帯端末の液晶画面がホーム画面からイン

ターネット接続画面へと、早々と移動する。

俺は検索ワード入力欄に、楽なアルバイト、と入れると、暑苦しくなつて来た制服の袖を大胆に捲る。

そうして、大抵見つからない様な調べ物をしながら、俺はボケーと休み時間を浪費していた。

「なに調べてんの？」

これは暇な時間を過ごしたくない隣人が堪えきれず、俺に問い合わせた言葉だ。

俺が首を持ち上げ、そちらに視線を送ると、何に対してもか、首を傾げる隣人。

「アルバイト。」

俺が簡潔にその答えを示すと、面倒くさい感じに身を乗り出して画面を覗こうとする隣人。

隣人隣人言つてるが、本当に名前がわからないのだ。
多分これが俺のコミュニケーション能力の低さへとそのまま連結しているのだろう。

じゃあ、仮にこの女は山本さんにしどこ。

「何で？」

こつちは親切に教えてやつたのだから、その答えぐらい自分で考える。と言いたくなるのは間違っているだろうか？

アルバイト。と答えたなら金が必要、以外に何の理由があるのだろう

か。

実際に友達が作りたいやら、彼女彼氏が欲しいなどといつ理由でバイトを始める程酔狂な奴は現代にはいないと思つ。だから、俺は山本の何で?と言つ質問に対し、何で?と聞きたくなつた。

「金が必要なんだよ。それ以外に理由あるか?」

画面をスクロールさせながら適当な声色で返す俺。この態度はあつちに行け。という意思表示にちゃんとなつてくれてるだろ?つか。

「まあ、そうだよね…。あつ! そういえばウチが今バイトしてる店、他にも何人か雇いたいとか言つてたよ?」

どうやら、俺の必死の懇願はなんの意味もなさなかつたらしい。だが、その代わりに何か美味しい話が目の前にある気がしてならない。

「時給は? てかどんな仕事?」

インターネットでもしつくりしたのがヒットしていない俺にとつて、こうこう話は大歓迎の一言だ。

「ファミレスだよ。Pukka。」

Pukkaとは、その店舗の完成度の高さから結構な人気を誇る、今日日本でチヨーン店の多さが上位にランクインをされているファミレスだ。

因みに読み方は” プッカ ”だ。

「へえ。時給ビビゴリー?」

俺が聞くと、ニヤリと笑つてトコトコと俺に近づいてくる山本。一瞬身構えたが、じつせり、耳打ちするための行動らしい。周りにいる奴はそんな気にするほどでもないと思つが、まあ俺はそれに従う。

そして、鼻に伝わる女子高生特有の甘い香りとともに、耳に伝わる

吐息。

少し柄にもなく緊張したが、気にせず耳から伝わる情報を脳に伝達する。

「―――。」

「……決めた……P u k k aで働く。」

俺の耳が聞いたのは、高校生には少々刺激が強いのではないか?と思える程の金額量だった。

「フフ、じゃあ店長に言つとべ。」

人付き合いがこんなところで役立つとは思わなかつたが、俺は今でも変わらず使われてこりお礼の言葉を精一杯の感謝を込めて、目の前の女子に送る。

「あらがとうござります。山本さん。」

敬語を使う事など滅多にない俺だ。おちよくなつてゐる様に聞こえるが、本心はそんな事は無く、感謝でいっぱいだ。

俺が言うと、何故か微妙な表情をしたまま、山本は俺の顔を見る。

「山本って誰?」

そりゃそうだ。

と思いながらも、俺は必要の無くなつた携帯電話にお休みを告げる
かの様にスイッチOFFのボタンを押した。

第四話（前書き）

誤字、脱字、「感想など」や「おもいたら頂けると嬉しいです」と
一）三

第四話

俺は今バイトを紹介してくれると言つていたクラスメイトと県の大街道を歩いている。

ソーラーパネルを搭載したエコカーがアスファルトを踏み鳴らし、大気を受けながら静かな進行をしている。

俺は自分の情報の記された履歴書を持ち、未だに名を知らないクラスマイトについて、バイト志望のファミリーレストランに向かう。それにしても電話もせずに人伝にいきなり面接とは、切実に店長の性格を示してると見える。

何故この女と一緒に歩いているかといふと、なんでもない、携帯の電池が切れていたからである。

これだけ聞くと訳がわからないが、過程を話すとこんなものだ。学校帰りにバイト先へ向かおうと思い、場所を調べようとしたが、携帯は充電切れ。

家に帰るのも面倒くさいなあ、と思つていたら、この女が話しかけてきたのだ。

バイトの面接はいつ行くのか?といった様な質問だったと思う。一文字一文字、照らし合わせば多少の誤差はあるだろうが、まあ、そんなものだ。

そこで俺は何となく、気軽にこの女に事情を話した。別に特に隠すことでもないと思つたし、この状況を打破するのにいい策を提供してくれるかもと思つたのだ。

そしたらこの女は言ったのだ。

「だったらウチについてればいいじゃん。あたし、今日入ってる
し。」

それからこの様な状況になつた。

同じクラスの、名前も知らない異性と一緒に
夕日が薄赤く照らす道を歩く。

バイト先は思ったより近くなく、無言の状態が続くのはあまり、精
神衛生上良好ではないので、暇潰しがてら会話を試みる。

「なあ…。そういうえばお前名前なんていうの?」

デリカシーの欠けさに驚いた。最早欠けてるを通り越して砕けて
ると言つても過言ではないだろ?。

なあ、の後に何か気のきいた事をいつつもりだつたのだが、自分で
名付けた山本という謎の一文字に若干影響された感があるのは否め
ない。

「え?ウチ?…伊藤瑠璃香だけど…つひそりじやなくて!何!…?ウ
チの名前知らなかつたの!…?」

喚きながら虚しい事実を自ら知りうとする伊藤瑠璃香。

それにしても山本は一文字も合つていなかつたらしい。合つていた
ところで、別に嬉しくも何ともないのだが…。
堂々と間違つっていた事には少し謝りたい。
すいませんでした。

これも心の中だけの思想謝罪だが…。

「へえ、瑠璃香つて結構珍しい名前だな?」

俺はめげずに伊藤のツツコミをスルーしながらも会話の続行を図

る。

「え?まあ、でも蒼樹も充分に珍しいと黙つよ。」

「そうか?」

「うふ。」

会話終了。……。

それにしても折角、もつと繋がりそつだつたのに、うんつて返したら終わるのは目に見えると思うのだが…。
もしかしたらこの伊藤という女は俺とあまり、話したがつていなかもかもしれない。

まあ、それもそつか、と妙に納得してしまうが。

前も言ったとおり、俺はあまり、友達がない。それで悲しかった
りはないので、他人にも友達がないといつ事を大らかに公言出来るくらいの心の耐久度は備えていると見える。

俺が考え事を始めた事で途切れた会話を修正するために、伊藤は
新たな話題を提示する。

「やついえば。何にお金が必要なの?」

俺に金が必要なのは、理由は一つしかないと思つが。

「ゲーム…」

俺が言つと、一気に肩を落とす伊藤。

口からは「まあ、そつだよね…」と囁つ声が俺の耳にストレートで
届く。

俺は、当たり前だろ？と言いたくなる舌を誤魔化して、今懇願しているゲームについて説明する。

「なんたつて、VH初のMMOだ。買つ他はねーだろ？」

俺は、普通は買うだろ？と言つた様な心境を見せつゝ、”それ”的高性能さをアピールする。

「免許も持つてないやつが、車に乗れんだぞ？仮想五感は現実には近いって噂だし、高級料理だってゲーム内ならタダで食える。」「それだけ聞くと凄そうだけど…」

「お前も買え…」

「は？」

「どうせ、ジャスターかつてたならVHぐらい持つてんだろ？」「

ジャスターは完成度は高いが、何故か人気が無かつた残念なRP Gだ。

全体的に生産数が少かつたのも関係しているが、専用ハードの人気のなさも関係していただろう。

だが、意外にコアなゲーマーには好かれている隠れネタゲー。

「いや、まあ持つてるけど…」

「頼む。」

俺は、街道を歩く他の人々の目線も無視して、同級生の肩を掴みかかり目を真っ直ぐに射抜く。

この状況を第三者が説明すると、青い服の秩序を守る正義集団が到来するだろうが、そこは全く気にしない。

「で、あ、い、いいから、ちょっと離れて！」

肩を掴み、しっかりと固定している俺を押して距離を取らうとするが、俺は負けずに同級生に食いかかる。

伊藤は力を目一杯込めてるからか、顔を真っ赤にさせたまま俯いている。

「よくない！お前が買つなら俺はもつと頑張れる！」

MMOのレベル上げは過酷を通り越して、究極マゾヒストにしか通用しない様なパワーアップシステムだ。

だが、それもパーティを組むやつがいれば格段に殲滅の効率は上がる。

始めるからにはカンストを田描したいと思つていた俺に同業者はとても引き入れたい要素だ。

俺が尚も肩を掴んだまま揺すつていると、遂に伊藤は妥協したのか、言つてはいけない言葉を発した。

「わ、分かったから！だから、離してー買つかりー！」

俺はその言葉を聞くと、あつたつと手を離す。

「マジか！？言つたな？絶対だぞ！？」

「絶対かは分からぬけど…ウチも少しは興味あつたし…」

伊藤は肩をさすりながら肯定の意を示す。

「悪い。痛かった？」

「え？いや、別に痛くはなかつたけど…」

そう言つてまだ赤い顔を隠す様に手をブンブンと交差させる。

だが、俺はそんな事気にならない程気分がよかつた。これで尚更F
LOへの期待が高まつたからだと言える。

それと同時に思ったのは、意外に可愛いやつだな、という閃きの
理由が押しに負けたという事だけに下らない持論だった。

第四話（後書き）

あれ？ VRMMOの話だよね？と思つた人は申し訳ありません（
ーー）m
そのまま生暖かい目を見ててくれるとしても嬉しいです。（^_-
(^_-)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0901x/>

NOW Lording.....

2011年12月5日23時29分発行